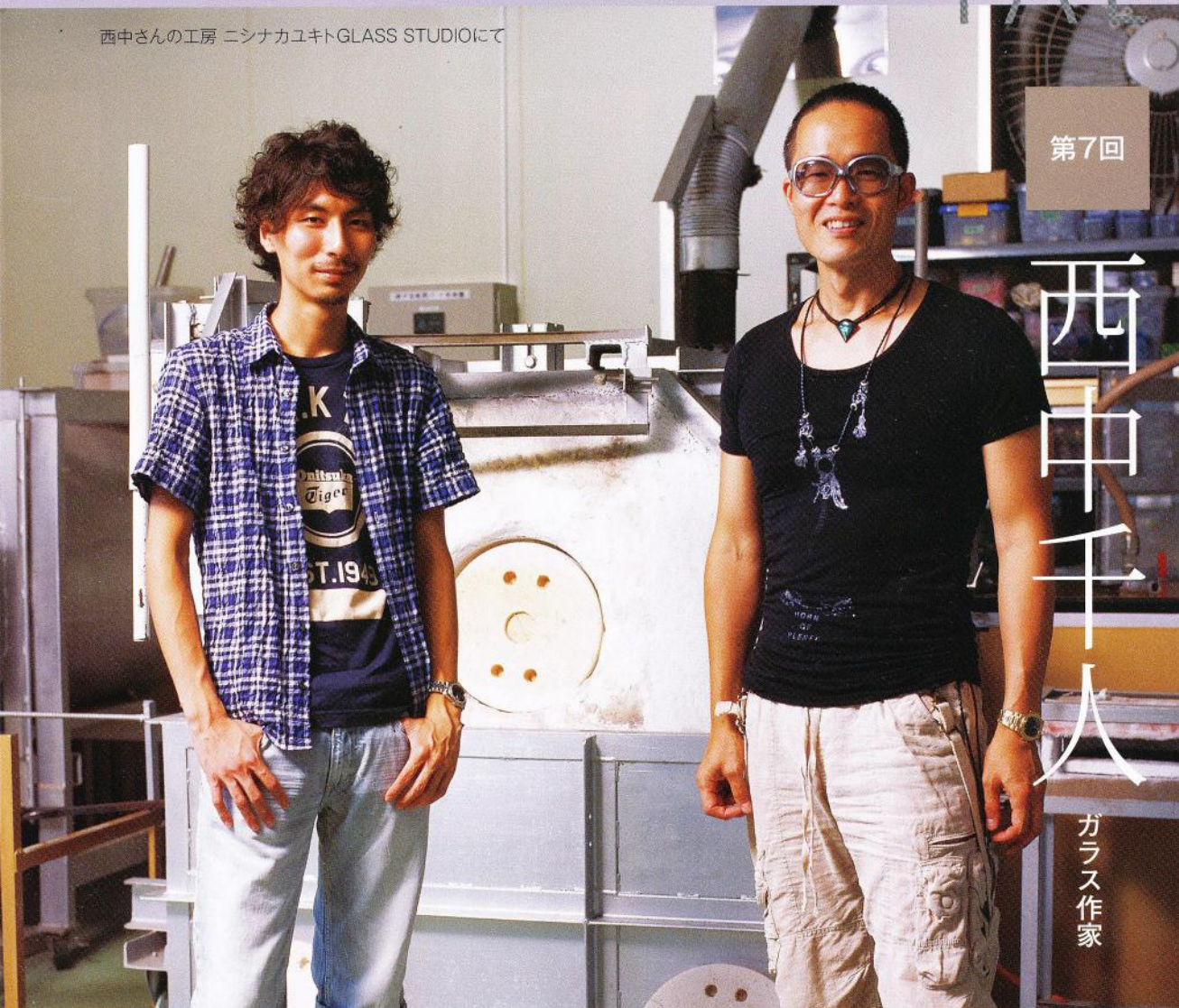


西中さんの工房 ニシナカユキトGLASS STUDIOにて

第7回

## 西中千人

ガラス作家



にしなかゆきと  
西中千人さんはガラスという西洋で発展した素材を使って日本の美を追及する、気鋭のアーティストです。

今回は対談に加え、千葉にある工房を訪ねた家元が、西中さんの作品に花をいけるというコラボレーションも実現しました。

構成／米谷紳之介  
写真／松尾幹生

### 欧米人が認める 日本のオリジナリティー

小原 西中さんはなぜガラス作家になられたのでしょうか。少年時代から芸術家志向があったのですか。

西中 子どものころは芸術家になろうなんて考えてもみなかったですね。中学校時代も美術の成績は決して良くなかったですから(笑)。大学も薬科大です。これでも一応、国家試験に合格して薬剤師の免許を持っています。

小原 それなぜガラスの道に？

西中 医療関係の仕事につくのが嫌だったんですよ。もともと注射が大嫌いだし、病院みたいな場所も好きじゃない(笑)。じゃあ、これからどうしようかと悩んでいた時期、たまたまドライブをしていて、ある浜辺のガラス工房を見学する機会があったんです。それまでガラスといえば、建物の建材や自動車ガラスのような、無機的で冷たいイメージしかなかった。それが工房の坩堝で溶けてオレンジ色になっているガラスを見て、それまでの概念が一変してしまいました。ドロドロに溶けたガラスを見たことってあります？

小原 一度、沖縄で琉球ガラスの作品づくりを体験したときに見ました。きれいですよね。

西中 あれが僕には衝撃的で、「やっ





「何十年か前におまえみたいのがうちに来ただけ、今は多摩美術大学で先生やっているよ。一度会ったらどうだ」と教えてくれたんです。それが伊藤先生（当時）。伊藤先生を訪ねると、ガラスを本格的に勉強するつもりなら、アメリカの芸術大学に行くべきだとアドバイスされ、すぐに渡米しました。二十三歳のときです。

小原 行動的ですね。アメリカでガラスを学ぶ上での苦労はありましたか。日本人がガラスを学ぶということを欧米の人はどう受けとめているのでしょうか？

西中 ガラスの製造は今から五千年以上前にエジプトで始まり、吹きガラスの技術は十三世紀にベネチアで完成しています。それだけ西洋ではなじみの深い、伝統的な素材なんです。しかし

日本にはあまりその伝統がない。彼らもそれを知っているから、僕が必死で勉強し、技術を研鑽し、ガラスでトップだったイタリア人を追い抜いても、見る目は冷ややかなんです。「案外やるじゃないか。鼻は低いけど、技術力は高いね」みたいな……（笑）。しよせんホンモノじゃないという認識です。

小原 欧米人が認める、ガラスに匹敵する日本の芸術というところ、やはり陶器になるのでしょうか。

西中 おっしゃる通り、日本の造形作品というところ、まず土のなんですよ。中国は磁器。中国人は土が嫌いなのか、あまり土の表情を残さないんですね。日本人は自然を受け入れることで文化を育んできた民族だから、自然の色や形や質感を大事にする。それが陶器であり、欧米人もそうしたオリジナリティーを高く評価します。

小原 そうなると、日本人がガラスでオリジナリティーを表現し、海外で評価を得るのは大変ですね。

西中 困りますよね（笑）。散々悩み

ました。勉強して、勉強して……。その結果、気づいたのがやっぱり自分は日本人だということ。日本の伝統文化に基づいた、二十一世紀の前面に通じるガラスの表現を追求するしかないんじゃないかと。しかも、それを世界中の人に分かる形で伝えていくのが自分の使命じゃないかと今は考えています。

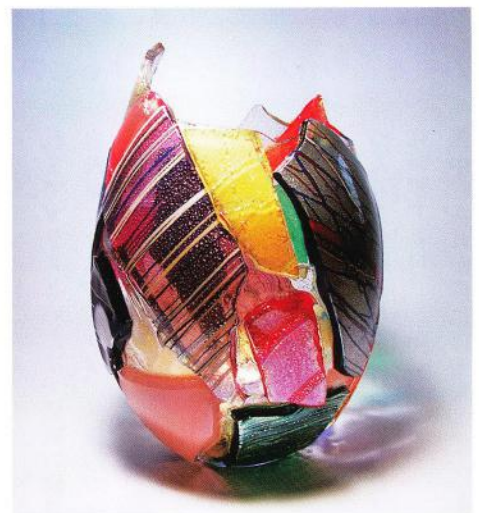
割れたものを再生し、  
芸術にまで高める

小原 ガラスで日本の伝統文化を表現するとは、具体的にはどんなことをされるのでしょうか。

西中 たとえば、最近、僕が取り組んでいるのが「呼継」です。これはもともと陶芸の技法なんですけど、聞いたこととはありませんか。

小原 不勉強で申し訳ありません。金継ぎなら知っています。

西中 考え方は同じです。金継ぎというのは割れてしまった器を漆で接着し、割れ目を金で装飾する手法ですよ



西中千人《呼継》2011年

不完全な美しさこそ  
世界に通じる日本の文化です。

ね。普通なら割れがわからないように修理するのに、あえて割れやひびを強調して見せる。壊れたものを元に戻すのではなく、元の状態を超えさせ、芸術にまで高めてしまうわけです。一方、呼継は異なる色の陶片をつなぎ合わせ、再生する手法です。これを僕は独自の解釈で発展させ、ガラスに取り入れました。さまざまな色ガラスを金地のガラスに溶かし込んで一つの作品にしてしまうわけです。

小原 確かに、呼継も金継ぎも日本の美意識の上に成り立っている技法ですね。呼継や金継ぎとは違いますが、お茶の世界で、あえて竹の節に美を求



花／ネベンセス ドラセナ・ソングオラインディア オンシジウム オフリザタム グロリオサ  
器／西中千人《瑠璃の巻》  
器を見た時、ネベンセスの姿を連想し、合わせてみたら面白いと思ったのです（小原）



て、その器の魅力の何たるかが分かる  
気がします。なかなか言葉では説明し  
づらいんですけど。

西中 その感性は正しいですよ。手で  
触るのは日本の文化なんです。食器が  
一番分かりやすいんですが、西洋は食  
器を手で触らないのがマナー、つまり  
手で触る文化がありません。でも、日  
本は茶碗をはじめ、器を手で持って食  
べます。だから、僕も海外の展覧会に  
出品するとき、器を手で触ることの大  
切さを伝えるのに苦労します。

### 土の中には すべての色と形がある

小原 西中さんは具体的な花をイメー  
ジして器をつくられることもあるんで  
すか。

西中 素人園芸をやっているので、た

まに庭に咲いている花をいけたいと思  
ってつくるようなことはありません。

小原 園芸を始めたきっかけは？

西中 親しくさせていたでいては舞  
踏家の田中泯さん（注1）の影響です。  
泯さんは山梨県の山奥で若い門下生と  
一緒に自給自足の生活をされているん  
ですが、僕がまだ三十歳を過ぎたばか  
りのころ、「土を耕しなさい。土の中  
にはすべての色と形、生と死がある」と  
教えられたんです。正直、そのとき  
は意味が分からなかった。でも、泯さ  
んが好きだから、現在の工房に移った  
十年ほど前からいろんな植物を育て始  
めたんです。最初は枝垂れ梅でした。  
枝垂れ梅は一月の半ばころから蕾が大  
きくなり始め、それが咲き終わると、  
透明な緑の新芽が出てきます。だんだ  
ん葉の色が濃くなり、夏には真っ黒な  
緑になります。そんな葉も冬になると、

める茶杓とか、茶入れの蓋の疵に良さ  
を見るといった価値観も同じようなも  
のですね。

西中 それらをひと言で言えば、不完  
全な美だと思えます。岡倉天心は「外  
見的に不完全なものを、心の中で完成  
することのできる人が侘びの美しさを  
発見できる」と言っていますが、こう

した日本独自の美意識は世界でも通用  
するはずだし、それを我々がもつと主  
張していくべきだと思いますね。僕は  
いけばなにも、不完全な美はあるよう  
に感じているのですが。

小原 不完全な美と言えるかどうか分

かりませんが、いけばなは左右非対称  
の構成に美を求めます。盛花での花型  
の基本は直角不等辺三角形です。時代  
をさかのぼっても、江戸時代に藤掛似  
水が東大寺でいけた立華も、直角不等  
辺三角形を基本とした構成だったと聞  
いています。

西中 なかなか興味深い話ですね。と  
ころで、今回、家元には僕の作品に花  
をいけていただいたんですが、器を選  
ぶときは何を基準にされますか？

小原 色と形、それと、手に触れた感  
覚ですね。目で見た質感、実際に手で  
触れた質感、この二つが結ばれて初め



にしなか ゆきと

1964年、和歌山市生まれ。星薬科大学卒業後、カガ  
ミクリスタル勤務を経て、カリフォルニア芸術大学にて  
ガラスと彫刻を学ぶ。帰国後、生命のエネルギーをガラ  
スの躍動感で表現することをテーマに創作活動を続  
け、第1回現代ガラスの美展大賞など数々の賞を受賞。  
その作品は国内だけでなく、スペインや北欧の美術館、  
大学等にも収蔵されている。



落ちて土に帰っていく……。

小原 田中浪さんがおっしゃった意味が分かってきたわけですね。

西中 若いころは何も見えてなかったんでしょね。今は水墨画に描かれた

木を見ても、そこに新芽の柔らかな緑

や落葉のくすんだ茶が表現されているのが分かります。まあ、こんなことが

二十代で見えたら怖いですけど(笑)。

小原 野球で、若い時に剛速球一本で

勝負していた投手が、ベテランになり、

力の衰えを配球や経験や観察眼でカバーしていくような感じですかね。

西中 赤瀬川源平さん(注2)が言う

「老人力」が自分にも備わってきたの

かなと。老いて体の力や機能が衰えて

も、逆に力が抜けることで見えてくることはたくさんあると思います。

小原 老いをネガティブにとらえる必要はないということですね。でも、西中さんは老いを感じるにはまだ若過ぎるでしょう(笑)。

西中 最近、老眼が始まったんですよ。これは、もう細かいことは見なくていいということじゃないかと勝手に解釈しています(笑)。モノも晩年は失明

同然でした。だから、花を描くときも花は見えてないわけです。光をほんやりと見たり、感じたりして描いていたんでしょね。そうした光の表現が傑作につながったんだと思います。

小原 老いは天が人間に与えてくれた新たなチャンスかもしれないし、人間の可能性はいろんな形で広がっていくんですね。でも、僕が老いの境地にたどり着くのはまだ遠い先のことです。想像もつきません。

西中 若いころはがむしゃらでいいんですよ。僕もそうでしたから。暴れた

だけ暴れてください。

小原 今は周囲をあまり気にせず、自由にも、誰もやってないことをやってやろうという気持ちです。西中さん同様、僕もいけばなを通して日本の美を世界に発信していきたいですね。



花／ネオレゲリア エクメア ブーゲンビリア 器／西中十人(包)

ガラスの水盤には、南国の花がふさわしいと考えたのですが、さらにインドネシアの仮面を置いてみたら、という発想です。後ろにあるのは無機質な質感を持つ冷却用の窯ですが、人の存在感のある工房らしさが、いけばなの空間として新鮮に思えました(小原)